

特集

# グリーフケア ～家族と医療者を つなぐケアを目指す！～



編集 關本 翌子

Asuko SEKIMOTO : 国際医療福祉大学成田病院看護部/  
認定看護管理者, がん性疼痛看護認定看護師

## 特集にあたって

がん治療は日々進歩し、がんと共に生きる人々も増えています。しかし、1986年以降、日本人の死亡原因の第1位は依然として「がん」であり、生涯でがんにより死亡する確率は、男性24.7% (4人に1人)、女性17.2% (6人に1人) にのぼります。人生の最期に寄り添う看護師の役割は、大きいといえるでしょう。

「グリーフ」とは、大切な人を亡くしたときに生じる悲しみや混乱、さまざまな心身の反応を指します。がん医療におけるグリーフケアは、遺族の心理社会的支援にとどまらず、死別を経験した医療者自身の心のケアも含む、多層的で継続的な課題です。患者と家族の人生に深くかかわるがん看護において、死別後に生じる悲嘆への支援は、臨床実践の質を支える基盤であり、同時に医療者の専門性を持続的に支える営みでもあります。

本特集では、家族・遺族と医療者それぞれの悲嘆とケアのありかたを俯瞰し、両者をつなぐ実践として注目される「デスケースカンファレンス」の意義を改めて考えます。デスケースカンファレンスは、故人を偲び、遺族の思いを受け止め、医療者が互いの感情を分かち合う場であり、遺族と医療者双方にとって悲嘆を統合する契機となりえます。さらに、ケアの質向上やチーム力の強化にもつながり、患者家族・遺族と医療者をつなぐ実践として発展が期待されます。

本特集の構成としては、まず総論として、がん看護における悲嘆へのケアとグリーフケアの意義、日本における悲嘆研究と実践の動向、そして臨床現場からのグリーフケア教育についてわかりやすく解説します。そのうえで、家族・遺族へのグリーフケア、医療者へのグリーフケア、さらに両者をつなぐケアとしてのデスケースカンファレンスの実際を紹介します。

本企画が、がん看護に携わる皆さまにとって、臨床におけるグリーフケアの多様なアプローチを理解し、日々の実践や教育活動に活かす一助となることを願っています。